原　隆一著

『イランの水と社会』

古今書院　1997年　xiii + 206 pp.

鈴木　均

はじめに

1979年の革命後，欧米のイラン研究の水準は，現地調査がほぼ不可能となったため，特に現状分析の分野で大きな後退を余儀なくされている。一方，日本のイラン研究者はその後も細々とではあれ，現地を訪れる機会が途切れることはなかった。本書は1970年代から90年代にいたるイラン社会の激動期を農村社会から捉えた貴重な記録（モノグラフ）である。それと同時に著者は地方の視点から普遍的なイラン社会像の提示を試みており，その意味では野心的なイラン社会・文化論でもある。

中東における主要な農業国のひとつであるイランの農村社会調査は日本では1960年代に大野盛雄が開拓し，イランにおいて農村調査に基礎を置く地域研究の礎石を築いた(注1)。これに少し遅れて岡崎正孝は特に水利に着目し，イラン地域研究から文化研究に接近した。それぞれ1980年代にそれまでの研究を纏めた著書を著している(注2)。

これらの著書と比較しての本書の顕著な特徴は，何よりもまずその全体を貫く論理的な構成にある。本書はモノグラフ的な内容であると同時に，全体の構成を通じて著者のイラン社会観をも提示している。著者は本書の冒頭で「乾燥地域における自然環境と，それへの適応技術である水利用，および，農村社会との関連」を示すことが本書のねらいであると述べており，ビールジャンド地方はその「事例」であると言っている（iページ）。

そこでまず本書の論理構成を内容の概観とともに一瞥しておこう。なお本稿におけるペルシャ語の表記は必ずしも著者の採った原則に従わないこととする。

I　本書の構成と内容

最初に本書の構成を目次にそって一瞥しておくと，以下のようになっている。

第I章　自然環境と歴史
　1.イランの自然環境　2.ビルジャンド地方の自然と歴史　3.フルクむらの自然と歴史
第II章　灌漑
　1.沙漠周縁地域と灌漑　2.ビルジャンド地方の水資源と灌漑　3.フルクむらのカナート灌漑　おわりに
第III章　経済構造
　1.農業　2.牧畜　3.絨毯　おわりに
第IV章　社会構造
　1.ホシュネシィン　2.平地農村の社会関係　3.山地農村の経済社会関係　4.収穫物の分配　5.部族，階層，婚姻
第V章　社会変動
　1.農地改革後のイラン農村の社会変化　2.イラン・イスラム革命後のビルジャンド地方農村の社会変化　おわりに
結　章

著者はまず第I章で，イラン全土の自然的特徴（山岳と沙漠）の抽出・類型化から書き始める。J・サフィーネジャードと岡崎正孝の議論を参照しつつ，著者はイランの国土を沙漠／沙漠周縁地域／山岳地域の3つのマクロな類型に分け，そのなかで本書の対象とするビールジャンド地方を「沙漠と山岳地域にはさまれた降水量100～200ミリ，高度1000～2000メートルの」（9ページ）沙漠周縁地域の典型例として位置づけている。

このビールジャンド地方の歴史を著者は「アラム家をぬきにして語れない」（15ページ）とし，その盛衰を軸にイランの一地方と国際関係の連関を描出する。

19世紀後半から20世紀初頭にかけて，イランの東

端に位置するビールジャンド地方が大英帝国と帝政ロシアの両勢力の「拮抗する戦略的に重要な地点であった」(17ページ) とする著者は，英国と手を結んだアラム家がシーラーズの名門ガヴァーム家とともにパフラヴィー王朝を支えていく経緯を述べる。

つぎに著者は彼の調査村であるフルクむら（人口1000人）に焦点を絞り込み，まず自然条件の類型化から叙述を始める。著者のここでのキー概念は「山地型」と「平地型」であり(注3)，またそれらの概念を用いたミクロ的な対比である。フルクむらの周辺地域におけるその対照を彼は3点に要約している。第1に自然環境，特に水の条件の違い，第2に自作農経営と大土地所有の違い，第3に谷口村落の地政学的重要性である。そして典型的な山地型農村であるフルクむらの自然生態系と，むらの城砦を拠点にして一時この一帯に勢力を張った地方豪族のラフィーイー家を中心としたむらの小史を，幾つかの断片的な文字資料を用いて再構成している。

次の第II章は，乾燥地域の農業のあり方を根底において規定している水という条件と，灌漑技術および水利慣行の複雑な発展を扱っている。著者は西アジア地域の農業が「遊牧，乾地農業，灌漑農業の3つの基本型に分類でき」，「それは水獲得の多寡と，その安定度によって決定される」(39ページ) とする。このような条件のもとでの灌漑技術の特殊な発展であるカナートを紹介したのち，著者は再びビールジャンドに戻り，同地方の灌漑技術と水利慣行を自身の実地調査に基づいて詳細に紹介していく。

まずビールジャンド地方全体について著者は水資源を地表水と地下水に分類し，前者を河川灌漑と洪水灌漑に分けて，とくに洪水灌漑の独特の発達形態であるバンド農法を詳細に紹介し，地下水についてもカナート，湧水源，管井戸に分類して紹介している。つぎにフルクむらのカナート灌漑について，漏刻（ターセ・ホモウ）を用いた用水単位から始めて，水利権者とその形態分類，輪番給水の実態，灌漑組と用水配分，灌漑調整の実態と方法，水とむら社会の関係へと論を進める。この部分は社会的システムについてのきわめて詳細な静態的叙述であるが，ことモノグラフという意味では，本書全体のなかでも最も精彩に富んだ部分となっている。

次に著者は第III章および第IV章の2章を費やして，フルクむらの生産活動および社会階層，社会関係をフィールドワークの記録に基づいて実証的に再構成している。

第III章では農業，牧畜，絨毯を取り上げ，「土地と水が絶対的に不足している」このむらの「複合的で多様な」生産活動のあり方を具体的に描出する。まず農業については谷口村落フルクむらが大土地所有でなく零細な農民的土地所有によって成立していることを指摘し，さらに彼らを上層農・中層農・下層農の3つの階層に分類して説明する。続いてむらの主要な農産物である小麦，砂糖大根，ケシ，ゼレシキ(注4)について農事暦を軸に記述している。これらのうち小麦のみが自給的作物で，砂糖大根，ケシ，ゼレシキは商品作物である。またゼレシキのみは果樹園で栽培されているが，著者によれば近年「むらの重要な商品であった砂糖大根やケシ栽培，それに，絨毯織りは頭打ちの状態にあったため，農民がゼレシキに活路を見い出そうと」(89ページ) しており，このため現在「耕地の果樹園化」が進行しているという。

次に，牧畜についてはフルクむらの羊や山羊の飼育をその管理方式から3つに分けて説明する。著者によれば「家畜放牧にかんして農民間に相互扶助的な協同関係がみられるのは，古い村落共同体的な要素の残滓を示すひとつの証拠である」(96ページ)。最後にフルクむらの絨毯生産について，その特徴として「男性の専業労働力に依存」する，「市場生産を目的とした農村工業である」ことを指摘したのち，生産過程における賃金，労働時間，原価計算の実際，買いつけ商人への販売過程における仲介人（ダッラール）の介在等を紹介する。

第IV章においては山地型農村であるフルクむらの社会関係が平地型農村との対比において描き出される。著者はまず「ホシュネシィン」と呼ばれる「直接農耕に従事」しない「土地なし」の村民に注目し，彼らを商業的ホシュネシィン，伝統的村抱えホシュネシィン(注5)，農村雑業層ホシュネシィンの3つの類型に分けて具体的に説明を加える。著者によれば

2番目の伝統的村抱えホシュネシィンがいわば「プロト」ホシュネシィンであるのに対し，他の2つは「生産諸力の発展や人口増加によって生じた」「派生的」ホシュネシィンである(注6)。つぎに著者は地主所有の平地型農村におけるティールカール集団（農業経営上の組織で，4～6人を1組として構成される耕区集団）などにみられる垂直的な支配・従属関係とフルクむらのより複線的な契約的関係を対比させ，その収穫物の分配方法のなかに再び「穀物経済がかって村落社会の中核をなし，村落が自給自足的単位であった時代の共同体的自助の残滓」（129ページ）を見出そうとする。

最後の第V章は前章までの叙述とそのスタイルを大きく変え，「社会変動」と題して1962年にはじまる農地改革と79年のイラン・イスラム革命を軸にした最近の政治的，社会的な激変をフルクむらという一農村の視点から記述する。だが1977年に同地方を最初に訪れた著者が60年代初頭以降の農地改革による地方的な変化を具体的に把握することはきわめて困難であったとみえ，前半部分の「農地改革後のイラン農村の社会変化」はイラン全体を対象にした簡潔な概観にとどめられている。

ここでの叙述の中心は革命後にフルクむらで観察された幾つかの社会的変化の記述である。ひとつはむらを取り巻く政治的状況の変化であり，それらは革命政権の農業政策と農村聖戦復興隊，イスラム農村評議会の創設とキャドホダー制(注7)の廃止，治安上の混乱と治安組織の改変，イスラム農地改革法案の動きなどである。ここで著者は「イラン・イスラム革命によって，歴史上，これまで長くつづいた伝統的な大土地所有者の水所有を基盤とする経済，政治的支配は終わったとみてよいであろう」（158ページ）という重要な指摘を行っている。さらに著者はフルクむらの革命後の社会・経済的変化の事例として，アフガン難民の流入と定着，ゼレシキの国内市場の拡大と絨毯の国際市場への流出について記述し，この最後のアフガン難民の箇所で「ヘラート文化圏」という新しい概念を初めて登場させる。

以上が本書の構成と内容であるが，特にその論理構成は著者自身のイラン社会・文化理解と密接に関わっており，本書全体がいわば新しいイラン社会・文化論の提示となっている。そこで次に本書の骨格をなしている著者の地域認識枠組みと，そこに孕まれる問題点を指摘していくことにしよう。

II　本書における地域認識の枠組みと問題点

本書は著者のイラン革命直前以来20年間のイラン東部一農村への断続的なフィールドワークやイギリスにおけるアラム家末裔との邂逅，文献的な調査を総合したモノグラフとしての性格をもっており，その意味ではイランおよび西アジアを研究する者にとって他では見出すことのできない貴重な一次資料が多く含まれている。

このことは著者自身も本書の特徴として主張しているところであり，「あとがき」の部分でその主要な項目を整理して列挙している。それによれば，まず第1に地方的，地域的な視点から中央の動向および国際関係との連関を解明し，より具体的にはアラム家の歴史的展開，国境を越えたヘラート文化圏，絨毯の国際市場化などの諸点を論じた。第2には，古くからの山地型農村におけるきわめて複雑なカナート灌漑の用水配分システムの実態を詳細に報告した。第3はホシュネシィン（土地なし村民）を伝統的村抱えホシュネシィンと派生的な商業的ホシュネシィン，農村雑業層ホシュネシィンの3類型に分けてその実態を記述した。第4は1979年の革命以降のイランの政治的・社会的変化を地方末端部の動きから捉えた。

だが同時に，冒頭で述べたように本書において著者は一地方の視点から普遍的なイラン社会像の提示を試みており，その意味で全体を貫いている筆者のイラン認識の枠組みにこそ，本書の独自性と限界とが最もよく現れている。それは具体的にどのような構造になっているだろうか。

ここで評者が本書の通読後にイメージした著者の地域認識の枠組みを図解して提示してみると，図1のようになる。まず著者のイラン社会像のひとつの基軸をなしているのは，中央―地方関係である。その場合，中央は必ずしも一義的にテヘランを意味す

るものではなく，場合によってマシハド，ビールジャンド，あるいは国際関係をも意味し得る(注8)。著者が中央―地方関係を重視するのは，本書の叙述が「イランの自然環境」から説き起こされていることとも深く関係している。著者の認識枠組みにおいてはまず静態的＝超時間的な自然環境があり，それへの適応としての技術ないし文化(注9)があって，それらとの密接な連関において初めてさまざまな社会関係が認識可能となるのである。著者が特に本書の第II章において灌漑技術と水利慣行の問題を可能な限り実態に即して詳細に叙述しているのもこのためであり，それは著者自身の言葉によれば「目に見えるモノや技術という即物的なものを手掛かりにして，経済，社会，文化を見ていく」(187ページ）という方法の実践である。

著者のイラン社会像のもうひとつの基軸は文化の多層性であろう。それを著者はビールジャンド地方において基層文化・イスラム文化・近代技術文化の3層に分けて理解しようとしている（183～185ページ)。図1のなかの垂直軸は本書における認識枠組みのさらに背景にある著者の時間意識（＝普遍的社会観）を単純化して図示したものであるが，これとの対応関係でいえば基層文化はより超時間的であり，近代技術文化はより時間的であるということになる(注10)。

ここでイスラム文化がどう位置づけられるかであるが，それはどちらかといえば超時間的な基層文化に近いけれども，同時に基層文化と対立するものとして著者は捉えようとしている。著者自身の表現では，イスラム文化は「ターエフェ基層文化(注11)と，近代技術文化の間にはさまれた，いわば，サンドイッチのような文化」(184ページ）ということになる。さらに基層文化はより自己完結的（＝自給自足的）な共同体的村落社会に対応し，これに対して近代技術文化はより開放的で外来的な近代資本主義的社会関係に対応している。

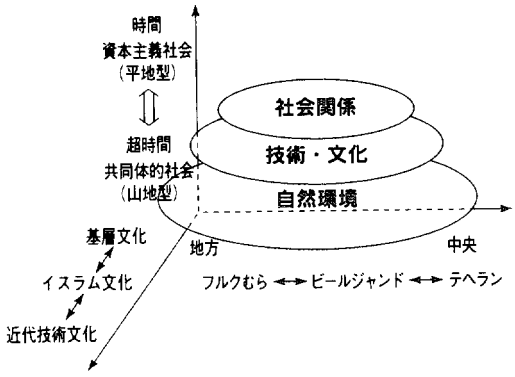
また本書の基本的な認識装置として「山地型」と「平地型」という対立概念が絶えず使用されているのも，著者自身がどの程度の普遍性を意識しているかは別にして，上述のような基本的な社会観が背景にあるといえるだろう。ここで山地型は伝統的な共同体的社会関係に対応する超時間的な類型であり，これに対して平地型は近代的な資本主義的社会関係に対応する時間的な類型であることは言うまでもない。

上述のようないくつかの基本的な認識軸のうえに，著者はその対象とするビールジャンド地方を，全ての人間的活動の基礎にある「自然環境」，それに適応して人間が生存していくための「技術」とその体系としての「文化」，さらにそれらのなかにのみ顕在化する具体的な「社会関係」という段階的な論理構成によって叙述していくのである。そこには認識対象としての乾燥地域の一地方を，風土的条件から伝統技術，文化の多層性，社会関係，経済関係，政治的変動にわたる諸領域について一貫した体系のもとに総体として描き出そうとする明確な意志がある。

図1のように図式化される認識枠組みによって，本書はビールジャンド地方の全体像を有機的に描き上げることにある程度成功している。だがその一方で，その枠組みと地域の実態とのあいだにいくつかの綻びが生じていることも事実である。以下ではその点を指摘することにしよう。

まず第1には，著者の理解する基層文化，イスラム文化，近代技術文化の3者の関係，特にイスラム

図1　本書の地域認識枠組み（イメージ）



（出所）　評者作成。
（注）　上図において自然環境―技術・文化―社会関係の層が垂直軸と平行であるように見える点については，特に他意はない。

文化の位置づけが，その背景にある二項対立的認識構造との対応において必ずしも明確でないという点である。イスラム文化は一面においては近代技術文化に先行してこの地域に根づいた普遍的な価値体系という側面がある。その一方で著者の指摘するようにイスラム農村の信仰心においてはイスラム的な要素と基層文化的な要素が渾然一体となっており，これを明確に腑分けすることは実際上不可能であろう。例えば著者は第V章でフルクむらのスンニー派意識について論じているが，彼らの「イラン・シーア派革命と，それにつづくイラン・イラク紛争の消耗戦に対しても距離をおいてみる傾向」(163ページ）を専ら地理的な条件や基層文化との関係のみで説明することもできたはずである。それを敢えて宗教意識によって説明したのは，スンニー派教徒であるということがフルクむらの基層文化とある程度の密接な関係を持っていると考えたからに他ならない(注12)。その一方で著者は結章の末尾で「公式イスラム」と「基層信仰」の対立関係を指摘している。これらを全体としてどう理解するべきなのだろうか。

第2に，著者が地域認識の背景にもっている二項対立的な社会観（図1の垂直軸）をイラン社会に適用した場合の妥当性についてである。著者は大規模商業的農業を発展させていった平地型農村に自作農的経営が主流の山地型農村を対置しており，フルクむらにおいて「集落がかって自給自足の単位であった時代の残滓」(180ページ）を見出している。それは確かに「地主の経営論理によって作られた平地農村の共同耕区組織とは異なるもの」(同ページ）であっただろう。だがこれをもって「村落が農民相互の自然村的契機によって作られたことを示すひとつの証拠」(同ページ）とし，山地型農村の伝統的技術文化のなかに超時間的な共同体的社会関係までも読み取ろうとするのはどうだろうか。もちろん著者が「かって自給自足の単位であった時代」というのは歴史的な過去のある時代を指すのでなく，このむらの基層文化に深く関わる超時間的な概念を意味しているのだが，それにしてもこのような二項対立的な認識枠組みの適用が，むしろこの地域の多様性と変化の実態への理解を歪める結果になっていはしないだろうか。

第3に，著者の地域認識のもうひとつの基軸である中央－地方関係に関わる問題である。すでに何度も触れたように本書は「自然環境と歴史」から説き起こしており，その叙述はイランからビールジャンドへ，そしてフルクむらへと徐々にフォーカスが絞られるような流れになっている。だが著者が本書の末尾において到達しているのは，この地域の基層文化と深く関わる「ヘラート文化圏」という極めて魅力的な概念であり，この概念は突き詰めれば，本書の出発点においては当然と思われた近代的な国民国家の枠組みをも自ずから突き崩すような衝撃力を持っていると思われる(注13)。著者は残念ながら本書のなかで「ヘラート文化圏」についての議論をほとんど展開していないが，これについては著者自身が今後の課題としている「宗教，慣習，家族，親族などの広義の文化領域」(188ページ）についての定点調査のなかで次第に明確な形をとっていくことが期待される。

以上3点にわたって本書の基本的な地域認識枠組みの問題点を指摘したが，著者が本書を通じて直面している上述のような問題は，同時に西アジア地域に社会科学的な立場から接近しようとする研究者がそれぞれに格闘していかなければならない問題であろう。ここでは何よりもまず20年の長期にわたる困難な現地調査の成果を一書にまとめ，西アジア地域の研究者に対して考察のための貴重な材料を加えられた著者のご苦労に感謝したい。

最後に本書のペルシャ語表記について触れておかねばならない。ペルシャ語の「エザーフェ」は「先行語に後続語詞・語句を文法的に関係づける前接小辞」であり，「現代ペルシア語の正書法では通常表記されない」(注14)。しかしこれが実際に付加されるか否かはペルシャ語表現の重要な要素であり，とくにカタカナ表記やローマ字表記において最大限の注意が払われなければならないことは言うまでもない。

ところが本書ではその点への意識的な配慮がなされていないために，ここで用いられているペルシャ語表現をそのまま言語的な資料として用いることはできないのである。例えば49ページほかで著者は貯

水槽に āb-e anbār と付記しているが，これは通常 āb-anbār であり，エザーフェがつくことは考えられない。もしエザーフェをつければ「倉庫の水」のような意味に取られるであろう。このような例はほかにも散見されるが(注15)，本書はモノグラフとして学術的な基礎資料となるべき部分を多く含んでいるだけに，この点は残念である。

（注1）　欧米におけるイラン農村の先行研究としては以下のものがある。

Ann K. S. Lambton, *Landlord and Peasant in Persia* (London: Oxford University Press, 1953)／Ann K. S. Lambton, *The Persian Land Reform 1962-66* (London: Oxford University Press, 1969)／Eric J. Hooglund, *Land and Revolution in Iran, 1960-1980* (Austin: University of Texas Press, 1982).

（注2）　大野盛雄『イラン農民25年のドラマ』日本放送出版協会　1990年／岡崎正孝『カナート――イランの地下水路――』論創社　1988年／拙稿「日本における発展途上地域研究　1986～94・地域編・中東―イラン」(『アジア経済』通巻400号記念特集　第36巻第6・7号　1995年7月) 236～246ページを参照。なお大野の『イラン農民25年のドラマ』は Hāshem Rajabzādeh 訳 *Kheyrābād-nāmeh* としてテヘラン大学より近刊の予定である。

（注3）　これらの対比的な概念については第II章で検討している。

（注4）　ゼレシキは著者の説明（87ページ）にあるように，木は3メートルほどの背丈になり，春には黄色い花が咲き，秋には赤く酸っぱい小さな実をつける。イランでは現在，この実を主にゼレシキ・ポロウ（酸味のあるピラフの一種），ジャム，ジュースなどの食用として用いている。

（注5）　これを著者は「農民との関係でもっとも重要な社会集団である」とし，「農民生産の補助，農具の製作や修理，それに，農村生活のサービスなど，村落内の公的な仕事に従事するグループである」と述べている。具体的には職人層（大工，鍛冶屋など），使用人層（浴場番，理髪師），聖職者，農業番（水番，高地番，牧夫）などである。著者によれば「かれらは一種の『村抱え的』な，ウェーバーがいうところの，農民と demiurgisch な関係にあった」(以上，114～115ページ)。

（注6）　ここでも著者は「プロト」ホシュネシィンのあり方に「イラン農村社会がかって，穀物経済を中心とした共同体的な流れのなかで展開してきた名残り」を発見しようとしている（115ページ)。

（注7）　キャドホダー制については大野盛雄『イラン日記――疎外と孤独の民衆――』(日本放送出版協会 1985年）に詳しい説明がある。大野によれば「キャドホダーという言葉を翻訳するとき，普通は村長とか部落長とせざるをえないが，本来農民がキャドホダーについて持っている理解の内容は，いささか異なったものである。マーレキ・ライーヤト制（イランにおける地主小作制の一形態――引用者注）のもとでは，キャドホダー自身もデヘ（イランにおける「むら」――引用者注）の農民であって，マーレキが農民支配のため，手代として農民の中から選んだ」(207ページ)。「キャドホダーは，外からはマーレキの支配と，内からは農民集団の，両者の接点に立ち，或るときはマーレキの，或るときは農民の，いわば二つの顔を持っていた」(202ページ)。

（注8）　なお評者はイランの中央―地方関係について，後藤晃・鈴木均編『中東における中央権力と地方性――イランとエジプト――』(アジア経済研究所 1997年）の序章および第1章で著者とは別の立場から論じている。

（注9）　著者はそれをivページでハード・テクノロジーとソフト・テクノロジーに分類している。著者の用語法によれば，ハード・テクノロジーは「風土のなかで生まれ育ち，経済社会系を媒介にして自然生態系に働きかける」在来技術であり，カナート灌漑技術はその例である。またソフト・テクノロジーは「経済社会系を媒介にして価値，シンボル，教育などといった文化系に働きかける」社会統合の機能をもち，部族的価値観やイスラム的価値観がその例である。

（注10）　これは基層文化をおもに扱った第II章で時間的な変化の要素が繰り返される時間の問題として以外にはほとんど記述されておらず（著者はこの調査がいつ行われたものかすらもあえて記載していない)，これに対してゼレシキや絨毯などの商品市場の拡大の問題では時代的な変化がむしろ叙述の中心になるといった点に典型的に表れている。

（注11）　これを著者は大略次のように説明する。すなわちビールジャンド地方のような沙漠周縁地域の流動性の高い社会においては，自然環境や社会環境の不安定性から人々は地縁よりも家族，親族，部族（ターエフェ）といった血縁関係を優先する。このような集団意識は社会のなかでもっとも変化しにくい部分であり，この地方の基層文化を形成している（183ページ)。

(注12)　このことは著者の記載するフルクむらの起源がゾロアスター教徒の定着とイスマイル派の山城という両論併記になっていること（27～28ページ）にも象徴的に表れている。

(注13)　ヘラート地方は本書のモチーフでは「アフガニスタン的」ということになるだろうが，アフガニスタンの側からいえば「イラン的な」と称される地域である。それだけにこの地方の地域的な独自の構造を明らかにすることは極めて興味深いテーマとなろう。

(注14)　上岡弘二「エザーフェ」(『言語学大辞典』第6巻　三省堂　1996年)。

(注15)　具体的には134ページの「ターエフェ」をめぐる表現，135ページの「父方のオジの娘」等の表現，142ページの「教育兵」以下の表現は，通常エザーフェを必要とすると思われる。

(アジア経済研究所地域研究第2部)